



毎

日ごみ処分場に通ううちに、そのおじさんたちも顔なじみになり、軽口を叩かれるまでになった。

「もう、説明せんよ。毎日来ちようなあけん。」

おじさん、半笑いである。

「まだまだ。当分通うから。」

「だけど、大変でしょう。お金かかるし。」

こちらの懐具合まで心配してくれるとは。確かに自家用車でこつこつと通うよりは、簡単な方法がいくらでもありはする。

「そりやそうだけど、業者に頼んだらもつとかかるでしょう。」

「まあねえ、でもねえ。」

おじさん、くたびれやせぬかと気を遣ってくれるのである。苦笑いしかない。

ぼくと同じく今年教員を定年退職した友人が、やはりずっと懸案だったらしく、退職直後から家のかたづけを始め、「五百キロ捨てた。」とメールをよこした。その量にびつくりした。

妻がネットのブログから見つけたのだが、ある断捨離で著名なエッセイストがやはりぼくと同じ状況で実家のかたづけをし、親の遺品を千キロ捨てた。もつとびつくりした。

ぼくも、いくら処分したのか気になったので、処分場で発行される領収証で計算してみた。毎回何キロ処分したのか記録されているのである。総量で一トンを優に超えていた。なぜか恥ずかしかった。

捨てるという発想を持たず、ため込めるだけため込む。家は、そのための物置にする。贈り物文化がそれに追い打ちをかける。昭和の終わりに公務員を退職した父に贈られた数々の退職記念品、そのことごとくが重く大きい。なぜ、手のひらほどの時計を何キロもある木に埋め込んで飾り物にしなければならぬのか。まったく意味がわからない。父が普段頼りにしていた時計は、数百円が目覚ましなのに。ぼくが退職したときに貰ったものが一枚の感謝状であったことを思うと、昭和と令和の違いにくらくらとしてくる。

世を挙げて物を作り、買い、贈り、ため込み、その物の終末など知ったことか、という時代だったのだ。感心もするが呆れもする。自分だったため込む片棒を担いでいるのだから、他人事にはできないし。

選別していても落ちがあかないので、父の重厚な退職記念品の数々も捨てさせてもらった。公平を期すために、ぼくの持つている捨てられなかつた重厚な物も捨てた。あの世でそんな言い訳を聞いてくれるかどうかはわからないけれど。

木幡智恵美 (その2) 52

木幡智恵美

パバルウ星人 (3)

コロナ感染がじわじわと広がり、志村けんさんが亡くなったというニュースには衝撃を受けた。これを機に、新型コロナウイルスの恐ろしさが多くの人の胸の裡でぐつと増した。

長男は、神戸から、同じく感染者の多い神奈川県に転勤となる。ただ救いは、神奈川県といつても静岡に近い小田原で、感染者の多い都市部から大分離れていることだ。一軒家で、窓からは富士山が見えるとのこと。長男に会いに行きがてら、あちこち見て回ることも楽しみで、富士山と言えはなおさらだ。でも、このコロナ禍だ。収束するまでは、長男に会いに行くことも、富士山を拝むこともできない。

二男は、年度末から新しい職場に移り、毎日帰ってきてはため息をついている。市内で二番目に古い建物の上、職場の体制が独特で、なかなか馴染めないのだという。これまで居たセンターが半端でない暑さで、夏が来る度に辞めたい病が起き、やつと新しい施設で働けると気持ちを立て直していたのに、病がまた頭を持ち上げてきたようだ。

そんなこんなで新年度が始まり、我が島根にもコロナが入ってきた。しばらくすると、クラスターも発生し、コロナの恐怖がより身近になってきた頃、「保育所は休まずやるらしいけど、自粛する人たちが出てきてね。うちもどうしようかなと思って」と娘から相談を受けた。「あんたたちが決めたように、こちらは対応するよ」と答えた翌日、「忠ちゃんと話して、保育所は休ませることにしたけん、協力してもらえ」という電話が入った。義母が家に居る時は家から離れないので、娘が三人連れて我が家に来て、デイサービスに行く日には、私が玉湯に子守に行くことに。

宗矢の首が座り出し、少し楽になるかと思いきや、お母ちゃんでないかだめになってしまった。実歩もそうだった。お食い初めで忠ちゃんの両親も交えて食事会をした時、顔を見ると泣くので、皆が実歩に顔を折るようになる。そして、ウルトラマンに傾倒している寛大はと言えば、必ず私に戦いごっこをせがんで来るのだった。

30代フリーター やあ、ジイさん。今年の憲法記念日も総理大臣が改憲派の集いにメッセージを寄せた。自民党が憲法9条に自衛隊の名を書き加えたがつているのは戦争をできるようにしたいからだ、と左派、進歩派から批判されている。

年金生活者 戦争を左派や進歩派が想定しているような破壊と流血をとまなう熱い戦争、リアルな戦争ではなく、抑止力を競い合う冷たい戦争、バーチャルな戦争と考えれば、彼らの批判もまったく的外れではない。9条は熱くリアルな戦争ばかりでなく、冷たくバーチャルな戦争も禁じる、世界で最も先進的な非戦条項だからだ。

自民党のやりたがつている戦争が熱い戦争ではないのは、それを遂行する意志も能力も胆力もないという理由からだけではない。世界の戦争の本流が東西冷戦を境に、熱い戦争から冷たい戦争に移り、超大国のアメリカでさえアフガニスタン、イラクの両戦争のあと、熱い戦争をほとんどできなくなっ

現在の米国の核政策を超える、先進的な視点を彼に取らせたと思える。

ペリーは2007年1月、ジョージ・シュルツ（元国務長官）、ヘンリー・キッシンジャー（元国務長官）、サム・ナン（元上院軍事委員長）と連名で核兵器のない世界を目指すべきだとする論文を米紙に発表している。

政権の中核で国防政策を担っていた現役時代は、世界の国々を敵か味方かという視点から見ることを強いられていたのに対し、リタイアしてからはそうした視点から解放され、世界をニュートラルにとらえ得る視点を獲得した結果と考えられる。世界を水平的、短期的にしかとらえられなかった制約から逃れ、俯瞰的、長期的にとらえることができるようになり、核兵器禁止条約の未来性に気づいたと推察される。

この条約はわが憲法9条の核兵器版であり、人類が戦争に向かって漂流を始めないように、人類自らが世界の

ているからだ。

破壊も流血もないとはいえず、冷たい戦争が否定されなければならないのは、軍事技術の絶えざる高度化によって、過去最大の熱い戦争だった2度の世界大戦よりも膨大な軍事費を消し、民衆の生活を圧迫していると推定されるからだ。そればかりではない。冷たい戦争がいつ熱い戦争に転化するかわからないという不安は民衆の精神を圧迫している。

30代 尖閣諸島に中国公船が執拗に接近する今、そうとばかり言っていられなくなるのではないか。

年金 尖閣諸島をめぐる日中の対立は「棚上げ」によってしか解消できないのに、両国はそれからますます遠ざかりつつある。

この状態がエスカレートすれば、最終的には武力による決着しか解決方法がなくなる。しかし、世界の戦争の本流が熱い戦争から冷たい戦争に移った現在、実際にそれを実行するのは不可能に近い。

流れの中におろした理念の錨にほかない。

30代 立憲主義の立場からは、憲法は国民が国家に宛てた命令書、国民が国家を縛る装置と考えられている。その憲法に逆に国民を縛る義務が書かれているのはなぜなんだ。

年金 国家を縛るためには、国家に縛られる必要があるからだ。

憲法の目的をひとこと言えば個人の自由を確保することにある。ニュー

そうすると、双方が行使を封じられた武力を威嚇に使う状態が続くことになる。それは冷たい戦争が偶発的に熱い戦争に転化する危険をとめない、両国や周辺国をはじめとした諸国民に無用な緊張を強い続けるだろう。

それを避けようとするなら、武力による威嚇を双方ともやめなければならぬ。日本国にはそれを積極的に主張するよりどころがある。それが「武力の行使」だけでなく、「武力による威嚇」を永久に放棄することを宣言した憲法9条だ。

中国は9条を日本の軍事大国化の歯止めとして評価してきたはずだ。だったら、あなた方もこの9条の理念にしたがつて矛を収めたらどうか。そう言える根拠を日本は持っている。

30代 逆にアメリカは自らが押しつけた9条を邪魔者扱いしている。

年金 アメリカの元国防長官ウィリアム・ペリーが、核兵器禁止条約を「支持する」と朝日新聞で語っている（5月9日朝刊）。現役を退いたことが、

トンの運動法則のひとつ作用反作用の法則をたとえに使っているなら、自由を確保しようとするれば必ずその反作用として不自由を強いられる。自由を理念とする近代国家はその自由を犯罪や侵略から守るために、自由を抑圧する警察や軍隊を必要としている。

日本国憲法は国民の3大義務として、教育、勤労、納税の各義務を定めている。国家に命令を発するには、それに見合う知識が必要だ。知識を獲得するには教育を受けなければならぬ。命令を実行させるには、そのための費用が要る。それは国民が働いて負担するしかない。

富の稀少性が消滅した理想社会を想定するなら、憲法というのは過渡的な仕組みであることがわかる。富があり余るほどある社会なら、子供に教育を受けさせるかどうか、働くか働かないか、といったことは個人の自由によって、他人の自由を侵害することはないし、公的な事業に必要な費用を強制的に徴収する必要もないからだ。

ニュース日記 784
中村 礼治

2021年の 日本国憲法